

児童・生徒の将来を視座した 生徒指導の在り方

—生徒指導の意義と時代の変化に着目して—

峯村 恒平

Kohei MINEMURA

教育研究所助教

山本 礼二

Reiji YAMAMOTO

人間学部児童教育学科教授



1. 2つの側面から見る生徒指導

児童・生徒指導は、学校教育において重要な教育活動の一つである。平成29年3月に公示された次期小学校学習指導要領（文部科学省，2017）においては、【第1章総則第4児童の発達の支援】の中に「児童が、自己の存在感を実感しながら、よりよい人間関係を形成し、有意義で充実した学校生活を送る中で、現在及び将来における自己表現を図っていくことができるよう、児童理解を深め、学習指導と関連付けながら、生徒指導の充実を図ること。」とあり、教育活動全体の中での生徒指導の重要性が明記されている。また具体的な教育活動とし

て「特別活動」においても生徒指導という言葉が登場し、「学級活動における児童の自発的、自治的な活動を中心として、各活動と学校行事を相互に関連付けながら、個々の児童について理解を深め、教師と児童、児童相互の信頼関係を育み、学級経営の充実を図ること。その際、特に、いじめの未然防止等を含めた生徒指導との関連を図るようにすること。」ともある。前段にあるように、「現在及び将来における自己表現のため」という、児童の人間的な成長、人格の形成といったことは生徒指導の「ポジティブ」な1側面であり、後段にあるように、「いじめの未然防止等を含めた」という、反社会的行動への防止や対処といったことも、生徒指導の「ネガティブ」な1側面である。これらの「ポジティブ」、「ネガティブ」両側面は、1981年の「生徒指導の手引」（文

部省、1981)の段階で「積極的目的」と「消極的目的」が生徒指導に含まれることは示されており、2010年の「生徒指導提要」(文部科学省、2010)においても基本的には教育基本法第一条に掲げられた「人格の完成」に則り「人格の形成」をその理念として掲げながらも、実際には「不適応」等としながらネガティブな側面についても多くのページを割いて説明している。

このような「ポジティブ」、「ネガティブ」の2面という政策的な背景に依拠しながら、生徒指導の実態については、これまで様々な研究がされてきた。しかし総じていえば、これらが対立的になっているという現状が示唆されている。例えば、尾木(2001)は、「積極的生徒指導」と「消極的生徒指導」の二極化が学校において進んでいるという指摘や、上杉(2003)は教員ごとに生徒指導実践の守備範囲が別れていたり、対立的になっていたりすることを指摘している。更に、この「教員ごと」ということに関して言えば、石村ら(2007)は、体育科教員の役割意識として「生徒指導」が抽出されたことを明らかにしていたり、内田ら(2008)も、生徒指導主任の意識調査の結果、抽出された「受容」、「ゆとり」、「指導力」の3因子のうち、保健体育科の教師である生徒指導主任は、他の教科の生徒指導主任より「指導力」が高いということを明らかにしていたりと、体育科教員と生徒指導を結び付ける論考がいくつか発表されてきている。感覚的には分かるような気がするが、「(保健)体育科の教員は生徒『指導』をする」というレッテルのようなものもあるのかもしれない。何れにせよ、誰がどんな生徒指導をする、ということに関して、先に挙げた尾木や上杉が言うとおりの、教員間で役割が別れていたり、対立的になっていたり、二極化していたりするという研究があることは事実として受け止める必要がある。

教員養成課程に目を向けてみても、生徒指導のポジティブな側面というのはなかなか理解が進んでいない現状が明らかになっている。例えば犬塚(1995)は生徒指導の授業を履修前に、教員養成課程の大学2年生を対象に、「小中高校時代を振り返って」という教示の上で生徒指導のイメージを聞くアンケート調査を行ったところ、上下の関係から子どもたちを操作すると行った、教師主導的な管理主義的イメージを強く持たれていると

いった考察をしている。藤田ら(1999)は教員養成課程の大学1年生を対象に「生徒指導」のイメージについて調査したところ、否定的なイメージが強かったことを明らかにしている。筆者らも生徒指導の授業のうち、13回を終えた学生にアンケート調査を実施したところ、消極的な生徒指導をより受けてきたと感じている学生ほど、消極的な生徒指導に肯定的な態度を示すことを明らかにした(山本ら、2018)。教員養成課程における授業でどのような生徒指導が必要か、理念や考え方、方法について学生に教授を進めていっても、やはりこれまで受けてきた生徒指導の経験というものがもたらす影響は大きい。ネガティブな側面ばかりが強調され、なかなかポジティブな側面が理解されないということがまた、実際の学校での実践で、理念どおりのポジティブな生徒指導をより融和に実施することを難しくしている。

2 時代の変化と生徒指導

ところで、ポジティブな側面、ネガティブな側面とは生徒指導の上でどのような関係だろうか。これは単なる二項対立ではなく、時代とともに関係性も変化してきているともいえる。これについて、上野(2011)の検討と、安川(2011)の検討から変化を見ていくこととする。

まず、上野(2011)は、文部省が発表した『生徒指導の手引』(文部省、1981、以下手引)と『生徒指導提要』(文部科学省、2010、以下提要)を比較しながら、変化について検討をしているものである。それによれば、1981年の手引の意義としては、「青少年の非行等の対策という消極的な対応」であったものから、2010年の提要では、「子どもたちの一人一人の人格によりよい発達を促すことを目指すこと」に変化したことを指摘しており、具体的な内容として、手引では「消極面の生徒指導(直接的な非行対策)」と「積極面の生徒指導(結果的には、事前の非行防止に役立つ)」という2つの意味での生徒指導の意義が機能論から表現されているとする一方、2010年の『生徒指導提要』では、そもそも積極面の生徒指導を前提とした表現に改められているのだと主

張している。すなわち、手引の時代は非行を阻止するという大枠の中に、積極的な生徒指導、消極的な生徒指導が含意されている状況であったが、提要の時代には、積極的な生徒指導という大枠の中で、それぞれの生徒指導が位置づけられる形に変化しているといえる。ただ、これだけでは大枠だけで、内容がどう変化したのかはよくわからない。

そこで確認したいのが、安川（2011）の議論である。安川は、生徒指導上の「問題行動」や「登校拒否」といった言葉を例にしながら、文部省の生徒指導資料（通知・通達・資料等）の変化を検討している。例えば「登校拒否」という言葉は、少なくとも1977（昭和52）年では『問題行動をもつ生徒の指導—中学校編—』（文部省，1977）において、「学業不振から怠学に転じ、やがて非行に走ったり、登校拒否に陥ったりすることがある」と指摘されている」とあるように、学業不振と怠学、非行、登校拒否と結びつけながら説明されていたものが、1982（昭和57）年に登校拒否が「心身の障害とか疾病などの明らかな登校不能の原因がなく、保護者も登校させようとし、本人も登校しなければと思っていても学校へ行けない状態」という説明がされ（文部省，1982）その概念が非行から離れ、個人の非社会的行動として理解されるなど、『「問題行動」という言葉の概念が、非行などの反社会的行動や、非社会的行為とされる内容にかぎらず、児童生徒の発達上の障害になると考えられる行動はすべて「問題行動」として教師が気づき配慮していく必要があると捉えられている』という変化を明らかにしている。すなわち、そもそも消極的な生徒指導が必要なものとして「問題行動」が理解されていた時代に対して、問題行動として捉えるべき概念の中に、例えば登校拒否のような積極的な生徒指導によって解決すべき、児童生徒の発達上の障害になると考えられる行動も含まれるようになってきたことが見てとれる。

ここまできるとまとめれば、生徒指導は「問題行動」と呼ばれるような、反社会的行動や、非社会的行為を抑制するという意義の上で、積極的な生徒指導、消極的な生徒指導がされてきたものが、時代の変化の中で、「問題行動」として捉える概念が児童生徒の発達上の障害となると考えられる行動にも及びながら、むしろ「子どもたち

の一人一人の人格によりよい発達を促す」という意義の上で、積極的な生徒指導で対応すべき課題が増えてきているということが、言えそうである。

3 積極的な生徒指導で養う自己肯定感

一方で、昨今の教育課題として「自己肯定感」を養うことの重要性がよく謳われる。平成29年6月には首相直轄の教育再生実行会議が『自己肯定感を高め、自らの手で未来を切り拓く子供を育む教育の実現に向けた、学校、家庭、地域の教育力の向上（第十次提言）』（教育再生実行会議，2017）を発表し、次期学習指導要領で掲げられた「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて、自己肯定感を高め、より主体的に学習活動に参加することの必要を訴えている。政策的な面だけではなく、もとより教育心理学等の先行研究においても、自己肯定感とキャリア意識との関係（徳岡ら，2010）、自己肯定感と不適応行動との関係（尾花ら，2008）など、キャリア形成や、不適応行動にも関係が指摘され、生徒指導においても自己肯定感に着目することの必要も訴えられている（濱本，2017）。

自己肯定感を養うにあたっては、例えば国立青少年教育振興機構（2017）が20代～60代の男女に平成28年に実施した調査によれば、親や先生、近所の人から「ほめられた経験」が多い人ほど、自己肯定感が高いことを明らかにしている。更に、褒められた経験も多く、かつ、「厳しく叱られた経験」も多かった人は、より自己肯定感が高い傾向も示している。生徒指導においても少なくともネガティブな生徒指導「のみ」を受けるより、ポジティブな生徒指導をより受けてきた学生のほうが、自己肯定感が高い可能性はあるだろう。

4 学生の印象から見る生徒指導

ここまでの議論を小括すると、まず生徒指導に2つの

側面があることを見てきた。それは「ポジティブ」な生徒指導と、「ネガティブ」な生徒指導である。これらは学校現場では、対立的になっていたり、二極化が進んでいたりすることを指摘する研究がある。また、教員養成課程の学生を対象に調査した過去の研究では、「ポジティブ」な生徒指導についての理解はなかなか進んでいない。

しかし、そもそも積極的、消極的な生徒指導は時代の変化の中でむしろ積極的な生徒指導に軸足を置きながら、また扱う範囲も拡大しながら今日に至っており、過去にあった反社会的行動や、非社会的行為を抑制するという意義での生徒指導は今日でも取り上げられており重要であることに疑いはないが、薄れてきてはいる。

こういった側面や課題、時代の変化は、教員養成課程で教育学を学び、将来教育者となる学生に理解してもらうことは極めて重要である。特に、自己肯定感等の観点からも、ポジティブな側面を前提に置いた生徒指導という考え方、スタンスの理解は重要な側面である。

そこで筆者らは、教員養成課程で教育学を学ぶ学生を対象としたアンケートを実施し、そもそも学生が「最も印象に残っている」生徒指導がどんなものなのかを尋ね、具体的に自己肯定感に結びつく生徒指導の在り方について学生の記述から検討し、実際の「生徒指導」の講義の在り方、ひいては初等中等教育における生徒指導の在り方について検討を進めていくこととした。

(1) 調査内容

調査は、紙による調査票調査で、都内A大学において小学校の教職課程を履修する大学2年生を対象に、2017年9月に実施した。「生徒指導」を主に取扱う講義の初回ガイダンス時に、配布を行った。

(2) 調査内容

調査は無記名で、性別、教員志望度、「最も印象に残っているこれまでに受けてきた生徒指導」を聞いた。

「最も印象に残っているこれまでに受けてきた生徒指導」では、具体的に「いつ」、「誰に対する」、「どのような指導」だったかを自由記述で記入してもらった。なお記入例の教示として「いつ：小学校のとき」、「誰に対する：自分に（あるいはクラス全体、学年全体、部員、生徒会役員、学校全体等）」、「どのような指導：（自由に記述してください）」を明記し、意図が統一されるよう留意した。

(3) 倫理的配慮

調査票の配布は授業時間内に行ったが、配布、調査の目的、趣旨の説明、倫理的配慮に関する説明・教示は、当該授業の成績評価に関係の無い者が行った。調査は無記名であり、調査票の冒頭には、本調査の目的、処理の方法、授業とは無関係であり成績に一切影響がないこと、調査協力は自由意志にゆだねられており、答えたくない質問は答えなくても良いこと、答えないことや回答の内容によって授業成績・修学に一切の不利益がないこと等も明示・説明した。調査票はその場では回収せず、回収ボックスを利用し後日回収を行った。

(4) 結果

回答者数は67名であった。内、白紙が1枚あり、有効回答は66件であった。性別の内訳は男性39名、女性27名である。なお、「最も印象に残っているこれまでに受けてきた生徒指導」については、無回答が12件あり、回答は54件である。以下54件について述べる。

表1に自由記述で記載された内容を分類した結果を示す。なお、分類にあたっては、中学校教師を対象に

表1 「最も印象に残っている生徒指導」への記述内容の時期と分類

| | 個人 | | | 集団 | | | 合計 |
|----------|-----|-----|----|-----|-----|----|----|
| | 小学校 | 中学校 | 高校 | 小学校 | 中学校 | 高校 | |
| ポジティブな内容 | 1 | 3 | 2 | 2 | 0 | 0 | 8 |
| ネガティブな内容 | 7 | 8 | 3 | 15 | 7 | 6 | 46 |
| 合計 | 8 | 11 | 5 | 17 | 7 | 6 | 54 |

積極的生徒指導と消極的生徒指導の実践状況と態度について検討した瀬戸（2006）が用いた尺度の項目を援用した。具体的には、ポジティブな内容としては積極的生徒指導に該当する「児童生徒の人格の完成を目指す生徒指導」、「児童生徒の自己指導能力の育成を目指す生徒指導」、「児童生徒の好ましい人間関係を育てる生徒指導」の3項目のどれかに該当するかどうか、ネガティブな内容としては消極的生徒指導に該当する「基本的生活習慣や日常的な生活についての生徒指導」、「遅刻や校則についての生徒指導」、「反社会的な問題傾向についての生徒指導」、「いじめ問題・不登校問題についての生徒指導」の4項目のどれかに該当するかどうかで分類をした。

先行の研究からある程度予想できることではあるが、ポジティブな内容について記載されたものが8件（14.8%）、ネガティブな内容について記載されていたものが、46件（85.2%）と、8割以上がネガティブな生徒指導の経験について記述していた。また印象に残っている内容は小学校時代のネガティブな内容がかなり多かった（7+15=22件、40.7%）。

さて、本論で特に着目したいのは、「ポジティブな内容」の「8件」についてである。以下にその内容を示す。なお、極めて個人的な内容について書かれていたものについては省き、以下では5件を紹介する。

- ①担任より、今後の進路について悩んでいる時に助言をくれ、自分の長所を教えてくれた。
- ②担任の先生が、そんなに自分の進路とか考えていると感じてなく合格だったと伝えるのがおそくなって、伝えた時に泣いてよろこんでくれたこと。
- ③進路で迷っている時に高校進学だけでなく、その後の将来のことも考えて、様々なアドバイスをしてくれた。
- ④学校の授業が面白く感じなかったとき、授業から逃げろのではなく、どうしたら面白い授業にできるかを考えなさい、と指導された。
- ⑤辛いことがあったとき、自分の辛い経験は必ずいい形になって帰ってくる、とアドバイスしてくれた。

1～3件目は進路についてである（1、2件目は高校、3件目は中学校）。4件目は授業の取り組み方についてである（小学校）。5件目は目の前の辛いことをどう理解するか、温かな先生の言葉が印象に残っているようだ（中学校）。

紹介した5件のうち、中学校、高校時のことについて書かれた4件のうち、3件は進路についてであった。そもそもポジティブな内容について書いた人が14.8%であり、3件というのは全体から見たら5.6%に過ぎないが、生徒指導提要（文部科学省、2010）においても「個別具体的な進路指導としての取組は生徒指導面における大きな役割を果たすなど、密接な関係」にあることも指摘しており、示唆的な意味あるものとして捉えたい。進路や将来を示唆しながら、児童・生徒の進むべき道を究極的に考えるその姿勢が、生徒指導の根底にも重要であり、そうして行われた生徒指導の側面が、ポジティブな内容の印象として、児童・生徒の記憶に残っていくのかもしれない。

そして何より、やはり学生の印象に強く残っているのは「ネガティブな生徒指導」であり、少なくとも自己肯定感という面からいえば、醸成に資するものではない。ネガティブな生徒指導が必要であることは筆者らも否定はしないが、明らかになっている学校での二極化や対立的になっていることを改善する方途や、そもそも生徒指導の在り方そのものについても議論を深めながら、ポジティブな生徒指導が印象に残るといふ大人が増えていくよう、検討を続けていく必要があるだろう。

5. まとめにかえて

本論では、「ポジティブ」な生徒指導と、「ネガティブ」な生徒指導という2側面が、学校現場では、対立的になっていたり、二極化が進んでいたりすることを指摘しながらも、しかしそもそも積極的、消極的な生徒指導は時代の変化の中でむしろ積極的な生徒指導に軸足をおきながら、今日に至っていることを見てきた。こういった側面や課題、時代の変化は、教員養成課程で教育学を学び、将来教育者となる学生に理解してもらうことは極めて重要である。特に、自己肯定感等の観点からも、ポジティブな側面を前提に置いた生徒指導という考え、スタンスの理解は重要な側面である。

学生を対象に調査をした結果、ネガティブな生徒指導

が一番印象に残っていると答えた学生が多く、課題を感じるところである。一方、ポジティブな生徒指導が一番印象に残っていると答えた学生の中には、進路についての生徒指導が数件見られ、進路指導と結びついた生徒指導というものの重要性も示唆的ではあるが、理解ができる。

第二著者は長い間、学校現場で実際に生徒と接し、若い時代は中学校教員として、退職を迎える十数年は中学校の校長として生徒指導の実践も行ってきた。これらの経験から、また本研究で述べてきたことから、改めて感じる生徒指導における大切な要素は、教員間の「共通理解・共通行動」という考え方である。共通理解・共通行動が取れるよう、生徒指導マニュアルを作成し、校内研修(OJT)や仕事を通し、生徒指導の在り方を全ての教職員が会得できるよう工夫を重ねてきた。こういった工夫は改めて、生徒指導の立場が教員間で二極化したり対立的になったりすることを防ぎ、教員組織として生徒指導を行う体制を構築することには極めて重要なことであると改めて思う。

また、常日頃から子どものよさを発見し褒める指導と、ときには毅然とした厳しい指導を通し、子ども一人一人の自己指導能力の育成を図ることが大切であると痛感している。子どものよさの発見と褒める指導を行うため、どの子に対しても「好き」になること、少なくとも「嫌い」にならないことを教職員に求めてきた。その子を好きになれば、関心を抱き、関心をもつことにより、見えてくるものが多くあると論じてきた。こういった態度は、単に目の前のいわゆる問題行動に対するネガティブな生徒指導だけではなく、その子の将来を見通したポジティブな生徒指導をより実践することに繋がるものと考え。また、日頃からの子どものことを「好き」になること、子どもとのよい関係を築きあげておくことは、厳しい指導を行うときにおいても、深い反省と再発防止につながる指導に繋がることも教員に理解させてきた。

若い教員時代に、非行・問題行動の頻発する中学校に赴任し、ネガティブな生徒指導を頻繁に行った。指導を受けた子は、大人になっても実によくそのことを覚えている。「あのときの先生は怖かったし、そのときは素直に受け止められなかったけど、今でも先生との約束は

守っていますし、感謝しています。」と言われると、少しほっとする。ポジティブな生徒指導のみが、自己肯定感の醸成につながるものではないと信じている。日頃のポジティブな生徒指導や、醸成された生徒との信頼関係の上での、ネガティブな生徒指導等を通じて、自己肯定感を高めることができると考えている。先にも紹介した国立青少年教育振興機構が行った調査で「褒められた経験」が多く、かつ「厳しく叱られた経験」も多い人の自己肯定感が高いのは、このような信頼関係の上で行われた指導の経験というもののようにも感じられる。

著者らは、マズロー(1943)のいう、自分がその集団から価値ある存在と認められ、尊敬されたいと求める「承認・尊厳欲求」を充足させるため、「一人一人のよさの発見と褒めるポジティブな生徒指導と、そのようにして醸成された信頼関係の上で、ときには厳しい毅然としたネガティブな生徒指導」の徹底を図り、成長欲求である「自己実現の欲求」をどの学校においても実践されることを願ってやまない。今後そのような実践ということも念頭に置きながら、これから教員になる大学生の指導や、あるいは生徒指導の在り方について、引き続き検討を行っていきたい。

引用文献

- 1) A. H. Maslow (1943) A Theory of Human Motivation. Psychological Review, 50, 370-396.
- 2) 石村雅雄・山西哲也(2007)「体育科教員の役割意識について」『鳴門教育大学研究紀要』第22号, pp.51-60.
- 3) 犬塚文雄(1995)「臨床的生徒指導の特質と機能—TOSからCOSへの改革をめざして」『学校教育研究』No.10, pp.59-72.
- 4) 上杉賢士(2003)「カリキュラム論からのアプローチ —チャータースクールからの示唆」『生徒指導学研究』第2号, pp.17-26.
- 5) 上野和久(2011)「『生徒指導の手引』(1981年)と『生徒指導提要』(2010年)の比較研究—「生徒指導の意義」における記述方法・意味内容の比較を通して」『和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要』No.21, pp.83-88.
- 6) 内田利広・伊賀真志(2008)「生徒指導主任の特性及び生徒指導上の諸問題に対する意識の実態調査：生徒への有効な関わり方とは」『京都教育大学紀要』No.113, pp.39-56.
- 7) 尾木和英(2001)「あらためて生徒指導を問う—何をなし得たか、何をなし得るか—」『月刊生徒指導』学事出版2001年

8月号.

- 8) 尾花真梨子・小林正幸 (2008)「児童の学校ストレスと不適応行動予防に関する研究(1)―自己肯定感及び社会的スキルとの関連から」『日本教育心理学会総会発表論文集』No.50, p.442.
- 9) 教育再生実行会議 (2017)『自己肯定感を高め、自らの手で未来を切り拓く子供を育む教育の実現に向けた、学校、家庭、地域の教育力の向上(第十次提言)』
- 10) 瀬戸健一 (2006)「消極的生徒指導と積極的生徒指導検討の試み」『学校心理学研究』No.6-1, pp.53-65.
- 11) 徳岡大・山縣麻央・淡野将太・新見直子・前田健一 (2010)「小学生のキャリア意識と適応感の関連」『広島大学心理学研究』No.10, pp.111-119.
- 12) 濱本一 (2017)「特別活動と生徒指導との連携についての一考察」『共栄大学研究論集』No.15, pp.221-236.
- 13) 藤田正・清水益治・伊谷實 (1999)「教育大学生における生徒指導と教育相談のイメージ」『教育実践研究指導センター研究紀要』No.8, pp.101-108.
- 14) 文部科学省 (2010)『生徒指導提要』.
- 15) 文部科学省 (2017)『小学校学習指導要領』.
- 16) 文部省 (1977)『問題行動をもつ生徒の指導―中学校編一』.
- 17) 文部省 (1981)『生徒指導の手引』.
- 18) 文部省 (1982)『児童の理解と指導(小学校生徒指導資料第1集)』.
- 19) 安川由貴子 (2011)「生徒指導上の「問題行動」をめぐり―考察:文部省・生徒指導資料の分析を中心に」『聖母女学院短期大学研究紀要』No.40, pp.71-77.
- 20) 山本礼二・峯村恒平 (2018)「生徒指導の経験が生徒指導のスタンスや認識に及ぼす影響」『目白大学高等教育研究』No.24 (印刷中).

その他関係法令等

教育基本法(平成十八年法律第二十号)

学校教育法(平成二十九年法律第四十一号)